

ミソハギ

牧 幸 男

日本人は古来伝統的な行事を大切にしてきた。しかし、最近、バレンタイン、クリスマスなど商業主義に踊らされる行事が強くなり、自然と関係した日本の伝統行事を大切に失っている。雛祭、端午の節句、^{ねはんえ}涅槃会*¹、灌仏会、七夕様、重陽の節句等は新暦で行い、季節との結びつきが薄くなっている。しかし、お盆（盂蘭盆会）の行事だけは昔と変わることなく月遅れの旧暦に近い日に行なっている。季節に最もふさわしい行事である。

お盆の行事については、先祖の「精霊」*²を家々に迎え祀る年中行事で、旧暦では7月の13日から15日頃までを中心とするが、月おくれや新暦で行う地方も多い。「お盆」*³月の始まりの日を「地獄の釜のあく日」*⁴と言い、地面に耳をつけると鬼の叫び声が聞えるなどとも言われている。

注*1 「涅槃会」：涅槃講や涅槃忌とも呼び、陰暦2月15日の釈迦の入滅の日に行なわれ得る行事で、釈迦の遺徳追慕、報恩のための法要である。

注*2 「精霊」：広辞苑では、草木・動物・人・無生物などの個々に宿っているとされる超自然的な存在。肉体または物体から解放された自然な霊。死者の靈魂。

注*3 「お盆」：お盆のはじまり：お釈迦さまの弟子「目蓮」は、優しい人であった。特に、亡き母のことが忘れられず、日頃自分を育ててくれた母の恩に感謝していた。ある時目蓮は、神通力を得、あの世の母を探すと、母は、地獄の餓鬼道で苦しんでいた。目蓮は、鉢に飯を盛って母にさし出すと、供養の飯は口に入る直前に火となって燃えてしまった。母の救いをお釈迦様におすがりすると、お釈迦様は「お前の母は、恵まれた家柄に生まれたにもかかわらず、人に施しせず、自分の欲望を満たすことだけで人生を過ごしてきた。そのために餓鬼道に落ちてしまったのだ。7月15日は修行僧が一堂に集まり、各人が過去を反省、懺悔して仏道修行に励もうとする日である。この日に皆様に御馳走し、母のために苦を抜き、楽を与えてくださるようお願いしなさい。お前のこのような行ないを見、母は自らを反省、やがて天に昇ってゆくことだろう。」と語った。

目蓮がその通りに供養したところ、母は地獄の苦しみから救われて浄土に昇った。これがお盆のはじまりと言われている。

注*4 「地獄の釜の蓋もあく日」：旧暦の1月16日と7月16日とされ、正月やお盆の16日は、地獄の鬼も罪人も呵責を休むことから、この両日はこの世の者もみな仕事を休むこと。

このお盆の時、仏前に欠くことができないのが、盆花あるいは精霊花である。月遅れのお盆は、これらの花の咲く時期とちょうど合致している。植物学者の丸山利夫先生は、お盆の仏前に供える花の条件を

- 一、野生の草本が多い。
 - 二、お盆の頃に咲き、色が鮮やかである。
 - 三、比較的咲いている期間が長い。
- としている。



ミソハギの花



マドリードの植物園にて

この条件の中でミソハギは植物名からも最も相応しい植物である。最近、この植物を目にすることが少なくなっており、盆花として飾られることも少なくなった。長野県内では、川土手やよどみ、田圃の畔でよく見掛けたが、川の構造が変わり、沼地等が少なくなり、目にする機会が減ってしまった。最近、栽培品が主流となり、野生種を主とした盆花の地位が落ちてきている。

ミソハギは、ユーラシア大陸や北アフリカ大陸に分布、ヨーロッパの植物園でよく見かける。我が国では本州以南のやや湿った場所に広く自生するミソハギ科の多年草である。高さ1m内外、茎は地下茎から直立分枝し、細長い、葉はほとんど葉柄がなく、対生し披針形で尖り基部も狭くなっている。夏の頃、葉腋に短くて小さな集散花序を付け、紅紫色の小花をつける。同じ仲間にはエゾミソハギがあるが、茎、葉とも細く細毛を密生しているので区別できる。

萩萩は盆花の代表と言われるように、お盆に関する詩歌が多いのが特徴である。

みそ萩の 花咲く溝の 草むらに 寄せて迎え火 たく子等のあり 若山牧水
みそはぎや 水につければ 風の吹く 小林一茶

植物名について牧野富太郎博士は、「^{みそぎはぎ}ミソハギは萩萩の略であると言われ、溝に生えるハギ、即ち溝萩とするのは誤りである。漢名は「千屈菜」と述べている。しかし、様々な説が伝わりどれを信じていいのかわからないほどである。一般に膾炙されている名前は、萩萩はお盆の精霊祭に用いるので「萩萩」の略で、「みそぎ萩」が「ミソハギ」に、あるいは水辺に生え花が萩に似ているから「ミズハギ」が転じたと言う説がある。その他、精霊棚へ常時お供えされ、お参り時に穂先を水に含ませ、振ってお清めする役割がある。「花穂で供養に水をかける習慣がある」ため、ミソハギ（萩萩）が短くなった。墓参のおり墓石に水をかける習慣があり、ミソハギの効能に「喉の渴きを止める作用」があることから、亡き人の渴きを癒すために、ミソハギを用いる説もある。精霊棚へ常時お供えされ、お参り時に穂先を水に含ませ、振ってお清めする役割がある。

別名は盆花、盆草、^{みそかはぎ そび}霊の屋草、水掛草、微萩、鼠尾草、河西柳等たくさんある。名前の由来は、生育環境やお盆に関係する事項が多く、水掛草はこの花で精霊棚に水をかけるために使うから、微萩は萩に似て小さいので、鼠尾草は花穂を鼠の尾に見立てたもの、河西柳は生育している姿から呼ばれた名であろう。

水掛草は江戸中期の国学者天野信影(1663~1733)の随筆集『塩尻』(1687)の中で「昔の医書に、この植物は咽の渴きを止めるのに効くとあるから、亡者たちの渴きを癒すために、この草で水をかけるようになった。」と記述がある。また、^{きまうそん}古くは径尊(生没不明)は『^{みまうごき}名語記』(1275)でこの花は悪魔を去らしめる力があると記述している。この言い伝えからお盆に使われるようになったらしい。学名はLythrum ancepsで、属名のlytronは血の意で花の色、種小名は二稜形意で茎の形を示している。

薬用への利用は古く、平安時代中期に源順が編纂した薬物辞典『和名類聚抄』(931~938?)に収載されている。花の終わる頃の全草を採取、日干した物を、^{せんくつさい}生薬名千屈菜と呼び昔から、急性腸炎、膀胱炎、浮腫などに民間薬として煎じて使用、煎液を外用として、あせも、かぶれに、また、靴擦れ、切り傷等の止血に用いる。

食用には、若芽を摘み取り、軽く湯がいてアクを除き、和え物、酢の物に、花も湯がき後サラダ等に添えることもある。そのほか、庭園での栽培、切り花等にも利用される

花言葉は「悲哀」「慈悲」「愛の悲しみ」「純真な愛情」である。

